

〔資料〕

一枚摺の世界 — その小釈の試み (3)

阿部 美香・吉田 唯・関口 静雄

〔解題〕「おふだ」について(1)

1

近ごろの日本人は宗教心が薄れた、とよく言われます。自分でも信仰心などないと広言している人が時々おられますけれど、そうした人の携帯やスマホのストラップには浅草寺や鶴岡八幡のネームが入っていたり、いつも御朱印帳を携帯していたり、車の中には所せましと神社やお寺のお守りが飾りつけられています。お寺や神社で新車のお祓いを受けている外国人の姿を見ることも少なくありません。お寺や神社でもそうした需要を見越して、ステッカー型のお守りやおふだを授与しています。お祓いや祈禱をした上に、そうしたものはや信仰グッズと言った方がいいかもしれません。そのグッズがよく売れるのですから、さぞやお寺や神社の大切な収入源になっているものと思われれます。

日本人であれば、神社やお寺にお参りしたとき、お守りやおふだ、破魔弓、熊手など、なにかしら神社やお寺で出しているものをいただいたこと、買ったことがあると思います。お参りした記念にか、お土産にか、あるいはこのお守りやおふだは「病気に効く」からとか、「商売繁盛」「家内安全」「交通安全」「縁結び」「安産子育て」「受験合格」にご利益があるから等々、理由や動機は人それぞれですけれど、神社やお寺でお守りやおふだをいただく、購入するということが、信仰心が深いとか浅いとかにかかわらず、それはやっぱりな宗教的行為だと考えられます。

さて、お寺や神社でいただく「おふだ」。たった一枚のおふだに描かれた神さまや仏さまの名やお姿に、わたくしたち日本人はどのような祈りや願いを託して来たのでしょうか。神仏に手を合わせるときには、何かしら

その霊験やご利益を期待するのがふつうです。また神仏の恩に真摯に心から感謝する人も多いことと思います。あるいは、呪ったり、呪い返しをするなど凄まじい祈願をする人もいるかもしれません。神仏に対する心はまことに多種多様なのです。

そうした日本人のとても複雑なこころ模様、もっと大きさに言いますと日本人の心の歴史、精神文化といわれるものを考えるうえで「おふだ」はよい手がかりを与えてくれるのではないかと思います。そうであれば、一枚一枚のおふだには秘められたメッセージといえますか、おふだが発信している情報があるはず。それを探りたいと思います。

2

それでは、「おふだとは何か」というと、これにきちんとした定義があるようで、ないというのが現状です。宗教学辞典・仏教辞典・民俗学辞典などをいくつ見ても、説明の重なりはあっても意見の統一はなく、どれも得心できる明快な説明とは言い難いようです。しかしそれもそのはずで、「おふだ」の名称からしてさまざまで、神道と仏教、それに仏教界でも宗派によって、また寺によって言い方が違うところがありまして、「おふだ」をいただくわたくしたちも、さまざまな言い方をしているのです。

ふつう一般に「おふだ」と総称しますが、木のふだや紙のふだ、それにもいろいろな形があり、内容にも多くの種類がありまして、一見して同じようなおふだでも「おまもり・護符ごふ・霊符れいふ・呪符じゆふ・神符しんふ・神札しんさつ・守札しゆさつ」などいろいろな呼ばれます。「おまもり」というと、錦布の小袋に入っているものを連想する方が多いと思いますが、紙のおふだを「おまもり」と

いうこともあるのです。それから「護符・靈符・呪符」というと仏教寺院、これはとくに護摩を焚く祈禱寺院や修験道系の寺院で出しているものが多く、**「守札」**を「もりふだ」というところもあります。なお護摩祈禱は厳重な作法によって行われますが、厄除けなどの目的で護摩祈禱したときの祈禱札や護摩札は、その作法上火災にかざすことから、「おふだ」といえば木札のことで、正月に出す牛玉札は紙札ですが、紙ふだとは言わず、もっぱら牛玉札と呼んでいます。

以上のように、「おふだ」についてほんのわずか触れただけでも「おふだ」が複雑な現状にあることが理解されると思います。そこで以下に、まことに表面的なものがですが、「おふだ」についてわたくしなりの整理を施しておきたいと思えます。（*は関連事項）

①おふだの名称

1. 一般 おふだ・おまもり・護符・靈符・呪符・神符・神札・守札・守札
 2. 特別 祈禱札・護摩札・牛玉・お掛軸・お軸
 3. 絵入 お姿・御影・御影・御神影・御尊影・絵札・お絵・おみえ
 4. 特定 角大師・豆大師・鬼大師・念仏札・地藏札・黒札・紅札
 5. 印文 寺社印璽・御印文・御手印
 6. 名号 南無阿弥陀仏〈六字〉・南無妙法蓮華經〈題目〉
 7. 署名 空海・法然・日蓮・祐天・徳本・木喰
 8. 其他 富札・花札・棟札・高札・日給札
- ②おふだの材質・形態
1. 材質 木・紙・銅・石
 2. 形態 木札〈天部山型長方形〉・紙札〈長方形、中札〉
- *帯・袴
- ③おふだの文字・印・図像
1. 文字 漢字・梵字・神代文字

2. 神仏 名号・神名・偈頌・経句・和歌・御詠歌・縁起
3. 効験 国家安寧・家内安全・風雨順時・悪病退散
4. 印文 寺社印璽・印文
5. 図像 観音・地藏・不動・鬼子母神・三宝荒神・半僧坊・三尺坊・聖徳太子・弘法大師・普寛

④おふだを意味する漢字

1. 「札」(サツ)……………薄い木のふだ。 *御神札
2. 「符」(フ)……………竹のわりふ。 *鎮宅靈符
3. 「攸」(ユウ)……………ところ・そのもの。 *護摩祈禱之攸
4. 「簡」(カン)……………竹ふだ・木ふだ。 *息災延命祈禱之簡
5. 「版」(ハン)……………木のふだ。
6. 「牘」(トク)……………木のふだ。 *御眷属拜借之牘
7. 「牌」(ハイ)……………薄い板きれ。 *骨牌・火牌・位牌
8. 「璽」(シ)……………しるし。玉製の印。 *盗難火防之神璽

⑤おふだの定義

おふだは護符の一種で、おもに木や紙に神仏の名前・偈頌・経句・祈願内容・祈禱内容や、また主神や本尊の像容などを墨摺りし、宗教的祈念を込めることによって、除災や招福に靈験があると信じられているもので、寺社から檀家や参詣者に配布される。

⑥おふだの特色

1. おふだは、お守りとともに日本を代表する護符の一つ。お守りは常に身に付け、携行し秘匿されることが多いが、おふだは神棚・仏壇・戸口・玄関・台所などに貼付表示される。中には服用されるものもある。 *〔飲札〕イザリ松千枚通し・巢鴨地藏御影・痔仏秋山自雲秘符
2. おふだは、年々歳々しかるべきときに交換される。 *お焚き上げ
3. 広く諸民族間には多種多様な護符が存在するが、そのうち除災的なものを amulet、招福的なものを talisman とし、しかし日本のおふだは明確に区別できず、むしろ除災と招福を兼ねていることが多い。

4. 古い起源を有する納め札や、江戸時代から太平洋戦争後まで盛んに行われた千社札は、参拝者が社寺参詣のしるしとして寺社に納めるもので、寺社から参詣者に配布されるおふだとは性格を異にする。

⑦おふだの起源

1. 巻数説

寺院が祈禱のために読んだ經典の名称と、読経の回数を記したものが、かつて伊勢神宮でも祓の回数を記したおふだを出していた。*御祓箱勧進説

2. 勸進説

寺院が堂・塔・仏像の建立や修復に際して、寄付を募るために、その目的を記して配布したもの。堂・塔・仏像を描き入れたものが多い。*御師・先達・勸進僧・護摩の灰・一遍上人の賦算

3. 亀甲説

紙ふだは長方形のものが圧倒的に多く、正方形がそれに次ぐ。この形態は紙製造の都合によるもので、経巻や経絵がその起源の一つと考えられる。木ふだは長方形で天部が山型であり、その形態が棟札と酷似している。この形態は卒塔婆や板碑にも共通するが、さらにその形態上の起源は亀甲に由来すると思われる。亀は霊獣であって、霊亀・神亀・宝亀・文亀・元亀などの和年号に使用されている。また亀は、「河図洛書」「天寿国曼荼羅帳」など文字と密接で、またマンドリン(羅甸語でテウトウード)・バイオリン(希臘語でケクス)など楽器と縁深く、何より神の意思を伝える亀卜と密接であることに留意すべきである。*大阪・四天王寺亀井堂の経木灌頂

⑧おふだの尊像

1. 如来 完璧にさとりに到達したもの。 仏陀。 *釈迦・阿弥陀・大日
2. 菩薩 仏陀になることを約束されているもの。 *地藏・観音・妙見
3. 明王 悪を滅ぼすために仏陀が化身した憤怒の形相。 *不動・愛染
4. 天部 仏法守護の神たち。 *毘沙門天・弁財天・摩利支天・大黒天
5. 権現 仏が権りに神の姿で世に現れた神仏習合の神々。 *秋葉・飯綱
6. 高僧 宗派や寺院の開祖。 *弘法大師・慈覚大師・法然・親鸞・日蓮

7. 行者 即身成仏行者・念仏行者・富士行者。 *役行者・彈誓・角行
8. 篤信 信仰心の篤い仏教徒。 *聖徳太子・衛門三郎・中将姫
9. 武将 神・仏に祀られた武将。 *徳川家康・豊臣秀吉・加藤清正
10. 神道 日本の神々。 *伊勢大神・大國大神・恵比寿神・稲荷

⑨おふだのいただき方と祀り方

1. いただく 正月・節分・縁日・大晦日。 *お焚き上げ
2. 正しく祀る 仏壇・神棚・天井・台所・竈・便所・戸口・玄関・門。
*龍吟山海雲寺「御神札の祀り方」
・千體三宝大荒神王は、ご家庭で一番大切な火と水をお守り下さる神様で、お祀りすると一切の災難を除き、衣食住に不自由しません。家内安全・火災消除・商売繁盛を祈って、火を使う所にお貼り下さい。
・烏瑟沙摩大明王は、世の中のけがれや悪事を焼きつくすぐ威力があります。お手洗入口の外壁に貼り、不浄をきよめ、お手洗を汚さないよう心がけましょう。
・金鱗札は玄関に貼り、災い事や泥棒がご家庭に入り込まぬように守っていただきます。

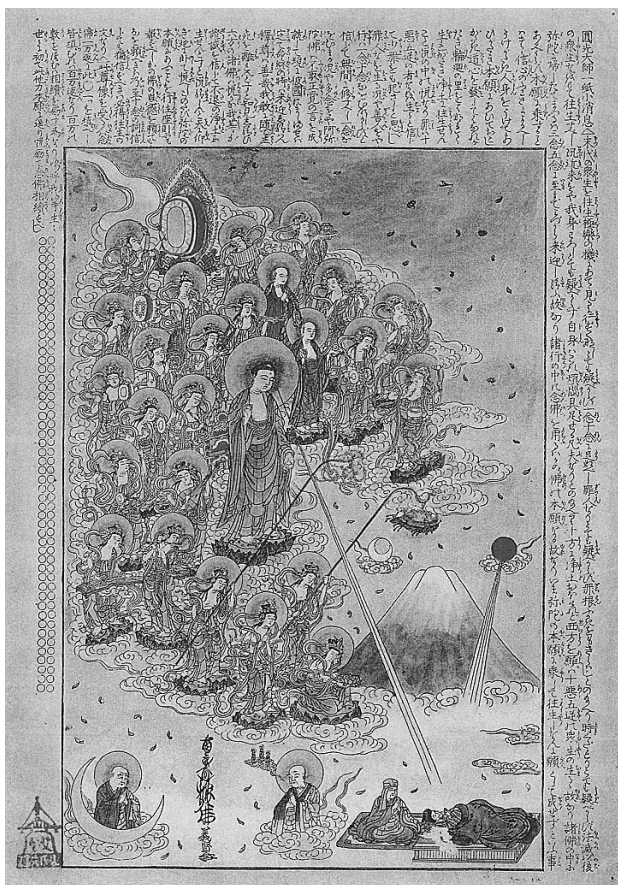
参考文献

- ・小泉八雲『知られぬ日本の面影』(一八九四年、第一書房版全集三所収)
- ・山中共古『影守雑記』(一九二八年、平凡社東洋文庫『共古隨筆』所収)
- ・矢部善三『神札考』(一九三四年、素人社書屋)
- ・熊谷清司「祈りの版画」(一九七八年、文化出版局『銀花』36号)
- ・町田市立博物館『護符・祈りの版画―神札と寺札』(一九八一年)
- ・ベルナール・フランク『日本仏教曼荼羅』(二〇〇二年、藤原書店)
- ・ベルナール・フランク『お札』にみる日本仏教』(二〇〇六年、藤原書店)
- ・町田市立博物館『おふだの世界―ベルナール・フランクコレクション』(二〇〇六年)
- ・宮島鏡・関口静雄『おふだの文化史展目録』(一〇〇七、二〇〇七年、一三年、宮島コレクシオン)

(関口静雄)

11. 阿弥陀如来二十五菩薩来迎図並義賢名号

木版彩色 四二・七×二九・九cm 江戸時代後期
龍谷大学大宮図書館蔵「禿氏文庫」朱印あり



本図¹は、左下にある六字名号と署名および花押から、江戸時代後期に活躍した木食の念仏行者「義賢」により弘められたものと知られる。

義賢は、紀州公や尾張公から、徳本行者（一七五八―一八一八）にも勝るほどの篤い帰依を受けたといわれる浄土宗の行者である。出羽国山形城下の観音寺村に生まれ、湯殿山で一千日の大行を果たし、奈良大峯山や四国修行を経て富士に修行する。五十四歳で立山に入寂する年（天保十一年〔一八四〇〕）にも、富士に修行し、善光寺・戸隠を経て立山での修行に励み、北陸を巡錫し、盛んな念仏教化を行っていたことは、『義賢行者当峯山籠中復履²』や『大鋸文書』（『加賀藩史料』第十五編、天保十一年）等に記

録されている。金沢城下での義賢は、紀州公から手向けられた阿弥陀像の宝幢を掲げ、行中に用いた錫杖につき、大香炉をくゆらせ、むかし徳本の安置した阿弥陀像と仏舍利を譲り受け錦の袋に入れて片時も離さず、素足で歩行したと伝えられている。その出でたちからは、徳本の跡をおって念仏修行に励む義賢の姿勢を見て取ることができる。

このような義賢にとっての富士修行の意義は、解明すべき重要な課題である。義賢は文政十一年（一八二八）の段階で既に富士修行を行っており（後述）、文保九・十・十一年には江戸白銀正源寺から富士修行に赴いたことも報告されている³。本図はそのころに江戸において配布されたものと考えられ、富士に修行した義賢の江戸における念仏教化の様相を伝える貴重な資料である。

その構成をみてみよう。来迎図の周囲には、法然の「一紙小消息」の詞が巡らされ、念仏一万遍ごとに〇印を一つずつ消し、百万遍行って「念仏相続」の心を励ますよう勧める詞が、「此尊像を受ける人は念佛一万返に此〇一ツを填べし。皆填むれば百万返なり。百万の数をつむは相続を励す為なり。嗚呼我等生々世々に初て此他方本願に逢り。悦励て念仏相続すべし」と記されている。この勧進文のあとに、数珠のように連なった〇印が一〇二個描かれ、百万遍の念仏を行う実践的な機能を備える。

法然の「一紙小消息」は、弥陀の本願である念仏を成就すれば、命終の時に必ず弥陀の来迎を受け往生ができるという、いわば念仏の肝要を、善導の教えとともにしたためたものである。その教えを証明するのが、善知識から最初の十念を授かり横臥し合掌する往生人のもとに、天華の舞うなか来迎する弥陀の図であった。画面左下に掲げられる義賢の名号は、善導と法然の両祖を右左に配し、その念仏が両祖師から相続されたものであることを主張する。この図は、義賢から念仏を受けた人々が、百万遍の実践を通して「念仏相続」の心を励ますために創出された尊像なのである。そこにおいて、阿弥陀とともに富士山があらわされていることは、義賢の富士修行と密接に関わるものとして注目される。富士の神は浅間大菩薩と呼ばれ、その本地は大日如来でありまた阿弥陀如来であると考えられてきた。義賢は表口である村山から富士山に登り修行に励むが、村山は平安時代後

期に「富士上人」と讃えられた末代上人が入定し、大棟梁権現として祀られた霊地であった。そこから富士に修行した義賢もまた、一時は即身成仏を志し修行していた⁴。富士の神との一体化を目指した義賢の念仏は、富士山と一体化した念仏であったといえよう。

そうした視点からあらためて本図を見ると、義賢の名号を含んで表されるこの来迎図の獨創性は、阿弥陀如来の来迎する場に富士山も共に描かれ、往生人に向かって同時に光明を放つところにこそある。富士山の日輪から放たれる光は阿弥陀の白毫から放たれる光と一對をなし、月輪の世界と重なり合うイメージをもって観想される。つまり、富士山の日輪と月輪を分かち合い、富士の神とその本地である阿弥陀如来が、共に往生人の許へ来迎しているのである。それだけでなく、富士の月輪は画面左下の法然の像とも響き合っている。勢至菩薩の化身と讃えられる法然は、月輪（三日月型）に頂かれて来迎する。その法然を、ここに月輪と観ずれば、一方の善導はおのずと日輪と観ぜられよう。それら両祖師の間に、富士に修行した義賢の「南無阿弥陀仏」の名号が掲げられ、その実践が勧められたのである。

このようにみれば、本図は阿弥陀来迎図、富士山曼荼羅、両祖師来迎図、「一紙小消息」と百万遍を勧める図の巧みな複合により企てられた尊像であった。その版木が、増上寺に残されていることからすれば、これを用いた念仏教化の場のひとつが増上寺であったと知られる。折しも、文化八年（二八一）には法然上人六百年遠忌、天保二年（二八三）には善導大師千五十年遠忌が迎えられている。両祖師の顕彰や富士講の隆盛という時代の流れに棹さして、富士に修行した義賢の念仏を受けた人々の間に広く流布したことであろう。それに美しく手彩色された本図（龍谷大学図書館本）のような享受の姿も、盛んな流布の一端を示すものであろう。

最後に、富士を介した木食行者の交流を示す事跡として、義賢と唯念の出会いについて紹介しておきたい。唯念とは、日本の木食聖の歴史のなかでは最後に飾る行者である。師の弁瑞和尚⁶に従って有珠善光寺に赴き、木食の行に入ることを決意して恐山や出羽三山での修行を重ね、文政十一年（一八二八）に富士に登る。それは、ひとえに義賢と謁見するためであ

った。義賢と出会い、富士での念仏修行に励んだ唯念は、富士の鬼門を守護する御正体山に入定した妙心行者の古跡を尋ね、妙善尼から有縁の地の在処を示され、奥之沢（静岡県小山町）に念仏道場（唯念寺）を開く。木食の行を志す唯念にとって、富士における義賢との謁見は、格別の意義を持つものであったに違いない⁷。唯念の伝記には、義賢の往生が伝えられている（『明治往生伝』三篇、明治十六年）。それによれば、義賢は念仏修行に熱心に励んだ「念仏三昧発得の人」で、常人の想像を超える奇異の事跡が多くあり、越中立山で命終を遂げ、茶毘のとき五彩の舍利をあらわしたという。

唯念をはじめ江戸の人々が富士に修行した義賢から念仏を受けること、それは富士山から念仏を受けることと同義であった。その念仏を相続し百万遍を満てることにより、富士の神との結縁のもとで阿弥陀如来が来迎する。それを約束し証明する便りが、この尊像であった。（阿部美香）

【注】

- 1 龍谷大学大宮図書館編『仏教の宇宙観』（二〇〇九年）にカラー図版で紹介されている。本図の先行研究に、玉山成元「善導・法然の来迎図」（『日本仏教史学』十四号、一九七九年）、田中美マルコス「黄檗獨湛の『勤修作福念図説』について」（『佛教学大学院紀要 文学研究科篇』三九号、二〇一一年）がある。
- 2 福江充「『義賢行者当峯山籠中復覆』—木食聖義賢と芦峯寺一山—」（『富山史壇』一三八号、二〇〇二年）。徳本と義賢の名号碑については、芝田悟「加賀・能登における念仏行者の足跡—近世後期の徳本・義賢行者名号塔—」（石川県教育委員会『歴史の道調査報告書 第5集 信仰の道』所収、一九九八年）の報告がある。
- 3 伊藤曙覧「義賢行者」（『越中の民俗宗教』岩田書院、二〇〇二年）。
- 4 遠藤秀男「富士山の謎」（大陸書房、一九七四年）には、村山修験の池西坊から義賢へ、入定を留まるよう嘆願する手紙が存していたことが報告されている。
- 5 前掲玉山論文参照。また前掲『富士山の謎』には、村山の奉納仏像の中に、増上寺の僧（鑑蓮社九世願蒼圓海）が義賢の入行中に奉納した旨を記す銘のあることが、仏像の写真とともに紹介されている（六四～六六頁）。
- 6 関口静雄「二人のペンズイ」（『昭和女子大学文化史研究』十七号、二〇一四年）。
- 7 阿部「富士の行者としての唯念」（『昭和女子大学文化史研究』十七号、二〇一四年）。

12. 日の丸名号

木版彩色 二七・一×二一・八cm 江戸時代後期
龍谷大学大宮図書館蔵 「禿氏文庫」朱印あり



【銘】 越後国頸城郡／居多神社境内

日／丸／名／号／親鸞聖人／御真筆／御旧跡／助惣滝

本図は、居多神社（新潟県）に所蔵される、伝親鸞（二一七三～一二六三）自筆の「日の丸名号」をもとにして、江戸時代に刷られたものである。

弘化四年（一八四七）の『虎勢道中記』¹は、これが居多神社の神職である居多喜内の家宝であり、青銅十疋で開帳され、誰でも見ることが出来たことを記している。同記にはその由緒を語る『居多浜御旧跡日の丸名号略記』（以下、『略記』と記す）も記録されている。

それによれば、親鸞が三十五才の時、「南都北嶺の衆徒の妬」^{ほくれい しゅと}みにより都を追われ、居多神社の前浜に着船し、滝の本の助惣の民家に滞在することになった。そののち、居多神社御手洗で口を清め参詣した途次に、夕日を感じ得る。その夕日（＝日の丸）の中に六字名号を記したが、この「日の丸名号」であった。

これは、「浄土三部経」の一つである『観無量寿経』に説かれる「日想観」を体得したものと考えられる。「日想観」とは、夕日が沈むさまを見て極楽浄土を想念する観法である。それを踏まえれば、本図は西（極楽浄土）の海に入る日輪（それは日神の象徴でもある）と六字名号を視覚化したものともいえるだろう。

親鸞はこの「日の丸名号」を奉納し、居多神社を讃える「末遠く法を守らせ居多の神 弥陀の衆生のあらんかぎりは」という和歌を捧げた。その奇瑞として、社頭の葦の葉が一夜の内に片葉になったという霊験も記されている。

本図左下に記される「助惣滝」とは、これも『略記』に「居多大明神の御手洗を助惣の滝といへる」と見えることから、親鸞が口を清めた御手洗を指すと知られる。それは、一連の霊験が起こった在り所を、確かに示すものであった。

このような『略記』の叙述において注目されるのは、真宗が神祇不拝を推奨しているにもかかわらず、親鸞が居多神社に参詣したり、「日の丸名号」と共に和歌を神に奉納するなど神祇を許容しているようにも見受けられる点である。²『略記』は、親鸞が都を追われた理由として「南都北嶺の衆徒の妬」²みをあげる。そこから想起されるのは、解脱房貞慶（一一五五～一二二三）の『興福寺奏状』「第五に霊神に背く失」である。そこには、「念仏の輩、永く神明に別る、権化実類を論ぜず、宗廟大社を憚らず。もし神明を待めば、必ず魔界に墮つと云云」と、念仏門が神祇を蔑ろにしていることを難する一文が記されている。このような批判を受けた真宗の神祇不拝は、覚如（一二七一～一三五二）・存覚（一二九〇～一三七三）の頃に

は許容する態度を見せはじめ、親鸞が神祇を許容していたかのような記述も見られるようになる³⁾。

寛如による親鸞の伝記『善信聖人親鸞伝絵』（鎌倉時代）を例に見ると、そこには「箱根夢告」と「熊野霊告」の章段で、親鸞が神祇と阿弥陀の關係について言及する場面が描かれるものの、いまだ親鸞自身が参詣するまでには至っていない。ところが佛光寺本（室町時代）では実際に親鸞が参詣を行ったと記されるようになる。それが伊勢神宮と鹿島神宮に参詣したとする記事である⁴⁾。このような真宗における神祇許容の流れの中で「日の丸名号」も作成されたと推測される。

神祇と関わる名号は、親鸞だけに留まらない。欣浄寺（伊勢市）には、法然（一一三三～一二二二）が伊勢参宮の折に感得したという、日輪の中に名号を記した「日の丸名号」が存在する⁵⁾。それは「朝日」を象る。これに対し、親鸞の「日の丸」は「夕日」であるから、両図は対比して捉えられていた可能性も考えられるだろう。

江戸時代の西大寺律僧・薄泉は、『神明帰仏編』に、法然の「日の丸名号」を実際に見学したと記している⁶⁾。親鸞の「日の丸名号」が開帳された江戸後期に、法然の「日の丸名号」もまた開帳され、おふだとして刷られていたのである。『神明帰仏編』は、法然の伊勢信仰について「世に知らまほしくて、今爰に記し置ものなり」と記しており、「日の丸名号」は専修念仏に神祇不拝という認識を払拭する役割を担わされていた可能性がある。神祇への接近の背景には、江戸時代における巡礼ブームも無視できないであろう。前述した『略記』によれば、居多神社は「御旧跡最初」の霊地として紹介されている⁷⁾。民衆が主体の観光地であれば、訪れる見物客が全て専修念仏の門徒とは限らない。そこで、親鸞が作成した「日の丸名号」を見物客に見せることにより、神祇を否定しているわけではないことを示す必要があったと考える。このように、居多神社で親鸞筆の「日の丸名号」が開帳され、本図が作成されたということは、近世期の真宗と神祇の關係を考える際に重要な現象なのである。

（吉田 唯）

【注】

- 1 渡部浩二「『虎勢道中記』の概要」（新潟県立歴史博物館編『虎勢道中記 越後編』新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野）によれば、本書は江戸材木通りの商人の旅の記録である。
- 2 本稿で記す「不拝」とは、神を拝んではいけないという禁止の意味ではなく、積極的に拝む必要は無いという次元での「不拝」である。『定本親鸞聖人全集』三（書簡篇、一四七頁）には、「よろづの神祇・冥道をあなどりすてたてまつるとまふすこと、この事ゆめゆめなきことなり」として、神明を決して軽んじてはいけないとの親鸞の文言が見える。
- 3 林智康「真宗における神祇観」（『真宗学』第七八号、一九八八年三月）参照。佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の神祇記述については、拙稿「佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の神祇記述について―付加された理由と役割―」（大取一馬編『日本文学とその周辺』思文閣出版、二〇一四年八月）参照。
- 4 そのおふだが、宮島鏡氏・関口静雄氏監修『第6回 おふだの文化史展』宮島おふだコレクションより（深川番所、二〇一二年）に紹介されている。
- 5 龍谷大学大宮図書館所蔵『神明帰仏編』下（九丁オ〜十四丁オ）。薄泉は安政年間（一八五四〜六〇）に『春日山記』を著している。本書の成立もその頃と考えられ、『虎勢道中記』と同時期に記されていたことがわかる。
- 6 由谷裕哉「親鸞の越後配所を巡る記憶の生成と確立」（『三田社会学』第一四号、二〇〇九年）は、「祖師にまつわる旧蹟群が、既に巡拝対象としてグループ化され」ていたことを指摘する。
- 7

（あへ みか 歴史文化学科）

（よしだ ゆい 兵庫大学短期大学部非常勤講師）

（せきぐち しずお 歴史文化学科）